

李賀「雁門太守行」の初二句について

小田 健太

はじめに

李賀（七九〇～八一六）の「雁門太守行」（呉企明『李長吉歌詩編年箋注』中華書局、二〇一二、一一五頁、以下『箋注』）は、次のような古体の詩である。

黒雲圧城城欲摧	黒雲城を圧して城摧けんと欲し
甲光向日金鱗開	甲光月に向かって金鱗開く
角声滿天秋色裏	角声天に滿つ 秋色の裏
塞上燕脂凝夜紫	塞上の燕脂 夜紫凝る
半捲紅旗臨易水	半ば紅旗を捲いて易水に臨む
霜重鼓寒声不起	霜重く鼓寒くして声起こらず
報君黄金台上意	君の黄金台上の意に報い
提携玉竜為君死	玉竜を提携して君の為に死せん

この詩は、『幽閑鼓吹』や『唐摭言』、『唐詩紀事』、『太平広記』などが載せる以下のような話柄とともに知られて

いる。ここでは『幽閑鼓吹』から引こう。⁽¹⁾

李賀以歌詩謁韓吏部。吏部時為国子博士分司、送客帰極困。門人呈卷。解帶旋読之。首篇「雁門太守行」曰、「黒雲圧城城欲摧、甲光向日金鱗開」。却援帶命邀之（李賀歌詩を以て韓吏部に謁す。吏部時に国子博士分司為り、客の帰るを送つて極めて困る。門人卷を呈す。帶を解き旋で之を読む。首篇の「雁門太守行」に曰く、「黒雲城を圧して城摧けんと欲し、甲光日に向かって金鱗開く」と。却つて帶を援き命じて之を邀えしむ）。

この逸話が事実であつたかどうかについては疑義が呈されているが、こうしたエピソードがいかにもありそうなきごととして受容されていたであろうことは十分推測できる。韓愈が、初二句を見ただけで李賀を迎えるために帶を締めなおしたと読める点にも留意したい。詩全体を通読し

て初めて理解される結構や内容ではなく、初二句の独立的な完成度の高さを韓愈が認めたことを示唆するからである。現実的にはやはり全体を読んでいたと考えるのが自然であろうが、そうだとすると、初二句が一篇の中心的な役割を担っているとは韓愈が考えていたことは動かない。本論では、初二句が詩全体の中でどのような役割を果たしているかという点についてはひとまず措き、二句そのものの表現上の特質に焦点を絞って行論していくこととする。

『幽閑鼓吹』と同様に「雁門太守行」の初二句を取り上げた記事として、楊慎『升庵詩話』巻九の「黒雲」の条には、実景に忠実であるか否かという側面から、二句に対する批判的な見解と擁護する意見とが記されている。⁽³⁾

唐、李賀「雁門太守行」首句云、「……」。『撫言』謂、「……」。宋、王介甫云、「此児誤矣。方黒雲庄城、豈有向日之甲光也」。⁽⁴⁾或問此詩、「韓・王二公去取不同、誰為是」。余曰、「宋老頭巾不知詩。凡兵圍城、必有怪雲・変氣。昔人賦鴻門有『東竜白日西竜雨』⁽⁵⁾之句、解此意矣。余在滇、值安・鳳之變、⁽⁶⁾居圍城中、見日暈兩重、黒雲如蛟在其側、始信賀之詩善狀物也」(唐、李賀の「雁門太守行」の首句に云う、「……」)。『撫言』に謂う、「……」と。宋、王介甫云う、「此の児誤れり。

黒雲城を圧するに方^{あた}つて、豈日に向かうの甲光有らんや」と。或ひと此の詩を問う、「韓・王の二公は去取同じからず、誰か是と為すや」と。余曰う、「宋の老頭巾は詩を知らず。凡そ兵城を囲むや、必ず怪雲・変氣有り。昔人鴻門を賦するに『東竜の白日西竜の雨』の句有り、此の意を解かん。余滇^{てん}に在つて、安・鳳の變に値^あひ、圍城中に居り、日暈^{ふた}兩つながら重なり、黒雲蛟の如く其の側に在るを見て、始めて賀の詩の善く物を狀^{かたち}るを信ずるなり」と)。

楊慎はまず『唐撫言』の逸話を引いた上で、二句に対する王安石の發言を載せる。王安石は、雲が厚く垂れこめていゝのに、どうして太陽に向かつて甲冑の光が反射するといふのかといつて、二句の描写に実景としての整合性が認められないことをもつて李賀を批判し、「此の児誤れり」と子供扱いする。楊慎は、韓愈と王安石のどちらが正しいのかとある人に問われたところ、「宋の老頭巾は詩を知らず」と、王安石を痛烈に非難した。その根拠の一つは、楊維禎の詩に、「東竜の白日西竜の雨」とあるように、太陽と雨が同時に詠じられた例もあるということである。もう一つは、楊慎自身の経験として、戦乱のときには太陽の暈が二重にかすんで見え、その傍らには黒雲も湧き起こつて

いたということである。ここでは、「雁門太守行」第二句の「月」を「日」に作って議論が進められているが、実景としてありえるか否かを論点に据える限り、「月」に作った場合でも同様の結論が導き出されたのではないかと推察される。

王安石と楊慎の見解の可否は措くとしても、「雁門太守行」の初二句が後世長く注目され続けていたのは確かである。しかし、具体的にはどのような点に二句の特徴があるかについては必ずしも明らかでない。そこで本論では、モチーフや語彙、またはその組み合わせといった観点から二句の特質を明らかにすることを目的とする。特に難解な語も用いておらず、平易なようにも見えるだけに、果たしてどのあたりに韓愈を驚かせたような特質が潜んでいるかを探るためには、李賀以前の類例と比較する必要がある。(8)

一 「黒雲圧城欲摧」について

まずは「雁門太守行」の第一句について考察したい。

「黒雲」の語は早くから詩に用いられている。無名氏「風雨詩」(遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』中華書局、一九八三、「全漢詩」卷二二、全八句)の冒頭には、太陽を遮るものとして「黒雲」が用いられている。

日不顧目兮黒雲多

日は目に顧らかならずして黒雲多し

月不見視兮風非沙

月は見視えずして風は沙に非ず

これ以降、しばらくは「黒雲」の語が詩中に用いられることはなかったようである。「風雨詩」の次に「黒雲」の語が詩に用いられているのは、呉均(四六九～五二〇)の「戦城南(陌上何誼誼)」(「全梁詩」卷一〇、全六句)である。戦場に浮かぶ「黒雲」が詠じられるようになったのは、それほど早くはなかったことになる。

3 黒雲蔵趙樹 黒雲 趙樹を蔵し

4 黄塵埋隴垠 黄塵 隴垠を埋む

黒い雲が、趙の地方の樹木を覆い隠すように湧き起り、黄色い塵が、現在の甘肅省一带を埋没させてしまうように舞っているという。「風雨詩」と同じように、「黒雲」は視界を遮るような不透明さの表象となっている。

庾肩吾「登城北望詩」(「全梁詩」卷二三、全六句)は、「黄霧」と対して次のように詠じている。

3 山沈黄霧裏 山は沈む 黄霧の裏

4 地尽黒雲中 地は尽く 黒雲の中

山が霧に包まれ、地上も雲に閉ざされている光景を詠じている。先に挙げた二首と同じように、ここでの「黒雲」

も見通しの利かない不透明感を醸し出している。

「黒雲」の語は、唐代に入ってから戦乱の場面に用いられる傾向にある。以下のような例がそれに該当する。

11 山辺疊疊黒雲飛 山辺 疊疊として黒雲飛び
12 海畔莓莓青草死 海畔 莓莓として青草死す

王宏「従軍行」(『全唐詩』卷三八、全一六句)

9 胡兵漢騎相馳逐 胡兵 漢騎 相馳逐し
10 軋戰孤軍西海北 軋戰 孤軍 西海の北
11 百尺旌竿沈黒雲 百尺の旌竿 黒雲に沈む
12 辺笳落日不堪聞 辺笳 落日 聞くに堪えず

常建「張公子行」(『全唐詩』卷一四四、全一二句)

3 黄河直北千餘里 黄河 直北 千餘里
4 冤氣蒼茫成黒雲 冤氣 蒼茫として黒雲を成す

常建「塞下曲四首」(『其三』(『全唐詩』卷一四四、全四句)

全四句)

「雁門太守行」もそうであるように樂府にしばしば用いられた語であることがわかる。王宏「従軍行」には山上にたたなわる「黒雲」が、常建「張公子行」には軍旗を覆い隠す「黒雲」がそれぞれ詠じられている。同じく常建の「塞下曲四首」(『其三』)は、兵士たちの憤怒や無念さが「黒雲」となって湧き起こった、という。

また、李賀と同様、「黒雲」と月を対に構成して詠じた例もある。錢起(七二二〜七八〇?)の「送張將軍征西」(王定璋『錢起詩集校注』浙江古籍出版社、一九九二、八二頁、全一二句)に、

5 戰処黒雲霾瀚海 戰処の黒雲 瀚海に霾り
6 愁中明月度陽関 愁中の明月 陽関を度る

と詠じられているのがそれに当たると。ただし「雁門太守行」とは異なり、城郭や兵士の甲冑などは詠じられていない。

ここまで、李賀以前の詩における「黒雲」の例を概観してきた。戦場に湧き起こる「黒雲」は、ある対象を遮蔽するものとして詠じられることが多いようである。「風雨詩」において太陽を隠すものとして用いられ、呉均「戰城南」では木々をすっぽりと包みこんでいる。唐代においても、常建「張公子行」では丈高い旗幟が「黒雲」の中に埋没している様子が詠じられている。李賀「雁門太守行」のように、対象を壊滅させるかのように圧迫するものとして「黒雲」が用いられたことはなかったのである。

ただし、「黒雲」に限定しなければ、雲が対象を上方から圧迫するといった情景を描写した例を見出すことができる。錢起の「広徳初、鑾駕出関後、登高愁望二首」(『其

一「『錢起詩集校注』一二頁、全一二句」に次のように見えている。

5 黄雲圧城闕 黄雲 城闕を圧し

6 斜照移烽壘 斜照 烽壘に移る

広徳元年（七六三）十月、吐蕃の軍隊が関中を侵犯し、それによって代宗が陝州（河南省三门峡市の西）に移ったことを傷んだ作である。黄色い雲が城郭を圧迫するように漂い、斜陽が烽火台やとりでを照らし出すというのである。「黒雲」と「黄雲」という違いはあるものの、李賀と似た句作りとなっている。類例は李賀以降の唐詩にも見られる。例えば、温庭筠（八一二〜八七〇）の「盤石寺留別成公」（劉学鍔『温庭筠全集校注』中華書局、二〇〇七、七七二頁、全八句）には、「山暈楚天雲圧塞、浪連呉苑水連空（山は楚天に暈なわって雲は塞を圧し、浪は呉苑に連なり水は空に連なる）」と詠じられている。

雲が対象を圧迫するようにたれ下がる光景を、「雲＋圧＋〔対象〕」というフレーズによって詩中に詠じるようになったのは盛唐の頃であり、その後中唐・晩唐を通じて用いられた続けたようである。

次に、李賀「雁門太守行」第一句の下三字のように、「城」と「摧」を一句のうちに取り入れた例について検討

したい。唐代以前の詩にそうした例は見受けられないため、大曆期（七六六〜七七九）の詩人である鄭丹の「明皇帝挽歌」（『全唐詩』卷二七二、全八句）が早い例ということになる。宝応元年（七六二）四月に崩御した玄宗への挽歌である。

5 地惨新疆理 地は惨として疆理新たに

6 城摧旧戦功 城は摧けて戦功旧し

玄宗生前の功績を回顧・賛美した一聯であり、外敵の城壁を破砕するような強大な武力を誇っていたことを「城摧」によって示しているのである。元和四年（八〇九）の作とされる元稹（七七九〜八三一）の「縛戎人」（楊軍『元稹集編年箋注（詩歌卷）』三秦出版社、二〇〇二、一三二頁、全五八句）の第二十五・二十六句にも、「半夜城摧鵝雁鳴、妻啼子叫曾不歇（半夜城摧けて鵝雁鳴き、妻啼き子叫び曾て歇まず）」というように「城摧」が見えている。

李益（七四八〜八二九）の「塞下曲四首」（其二）（范之麟『李益詩注』上海古籍出版社、一九八四、一〇五頁、全四句）は次のように詠じられている。

秦築長城城已摧	秦は長城を築くも城已に摧かれ
漢武北上单于台	漢武は北のかた单于の台に上る
古来征戦虜不尽	古来 征戦 虜尽きず

今日還復天兵來 今日還つて復^{また}天兵來たる

秦・漢の時代から繰り返される異民族との戦いに思いをいたした一篇である。第一句に注目したい。第四・五字に「城」字が重ねられている点、そこから一字措いて「摧」字が用いられている点で、李賀詩と似た詩句となっている。李賀が李益と交際していた痕跡はないが、偶然の一致とはいい切れないものを含んでおり、影響関係も想定しうる詩として位置づけられるのではなからうか。

ここまで、「雁門太守行」第一句の類例について検討を加えてきた。「黒雲」の語は漢代から詩に用いられ、空白期間を挟むものの、それ以後も戦場を描写する景物として多用されており、李賀詩もその系譜に連なっているといえる。ただし、李賀以前の詩における「黒雲」は、太陽や樹木、旗幟などを遮蔽するものとして描出されることが多かった。それに対して李賀の「黒雲」は城郭を破砕するかのよう⁹に重くのしかかるのであった。不透明感を演出する「黒雲」から、重量感や圧迫感を伴う「黒雲」へと用法が移行しているのである。「黒雲」の語に限定しなければ、錢起「広徳初、鑾駕出関後、登高愁望二首」(其一)のような類例を求めることが可能である。また、「雲+圧+〔対象〕」というフレーズは、盛唐の頃から詠じられ始めた

比較的新しいものであった。「雁門太守行」の第一句も、当時は新鮮な響きを持っていたであろうと推察される。

「城」と「摧」が一句中に取り合わせて詠じられるようになったのも唐代以降である。この点については、李益「塞下曲四首」(其二)と似通っているため、李賀の独創とはいいい切れない可能性がある。とはいえ、李益がすでに破砕されてしまった長城を詠じているのに対して、李賀は城郭が破砕するかもしれないかというギリギリの瞬間を切り取って詠じているため、そこに独自性を認めることはできる。梁超然「李賀詩歌賞析」(広西教育出版社、一九八七)が、「詩的開頭兩句、着意于氣氛的渲染、給讀者勾画了這場戰爭緊張的形勢」(一五頁)と指摘するとおり、城郭全体が今すぐにでも音をたてて崩れ落ちてしまいそうな抜き差しならない緊迫感が字句に掬い取られているところに、「雁門太守行」第一句のすぐれた技巧性を見出しうるのである。

二 「甲光向月金鱗開」について

本節では「雁門太守行」の第二句について検討を加える。「甲冑に反射する光が月に向かって金の鱗のように輝いている」というこの句には、どのような特質が看取されるのであろうか。

まず、兵士の甲冑に反射する光を指す「甲光」については、李賀以前の詩にほとんど見当たらない。わずかに張祐（七九二?～八五四?）の「楚州韋中丞筓篋」（尹占華『張祐詩集校注』甘肅文化出版社、一九九七、一二三頁、全四句）に、

3 恰值滿堂人欲醉 恰も満堂に値つれば人酔わんと欲す

4 甲光纔触一時醒 甲光纔かに触るれば一時に醒む

と詠じられているのみである。この「甲光」は筓篋の表面の光沢を指すと考えられるため、李賀詩との関連性は薄い。ただし、「甲」と「光」の両字を用いながら光を反射させた甲冑を詠じる例は唐代以前から見受けられる。以下、それらについて検討を加え、李賀詩との共通点、あるいは相違点を探りたい。

蔡琰（一七七?）の「悲憤詩」（其一）（『全漢詩』卷七）には次のように詠じられている。

7 海内興義師 海内 義師を興し

8 欲共討不祥 共に不祥を討たんと欲す

9 卓衆來東下 卓の衆來たりて東下し

10 金甲耀日光 金甲 日光に耀く

「金甲」の句は、甲冑が日光を反射して輝いているとい

って、董卓軍の勢力の盛んなさまを示しているのである。曹丕（一八七～二三六）の「至広陵於馬上作」（『全魏詩』卷四、全二二句）の第三・四句に、「戈矛成山林、玄甲耀日光（戈矛山林を成し、玄甲日光に耀く）」とあるのは、「金」と「玄」との違いがあるだけで、「悲憤詩」と似た表現となっている。

阮籍（二一〇～二六三）の「詠懷詩八十二首」（其三十九）（『全魏詩』卷一〇、全一四句）にも類例がある。

5 良弓挟烏号 良弓 烏号を挟み

6 明甲有精光 明甲 精光有り

第六句は、曹植「上先帝賜鎧表」（『初學記』卷二二、武帝、甲六）に、「先帝賜臣鎧、黑光・明光各一領（先帝臣に鎧を賜う、黒光・明光各一領）」とあるのを踏まえているのであろう。日月の光と明言されてはいないものの、やはり光をたたえたきらびやかな甲冑を指す。

続いて、『文選』に収録されている潘岳（二四八～三〇〇）の「閔中詩」（卷二〇、全二二八句）を取り上げる。

27 素甲日耀 素甲は日のごとく耀き

28 玄幕雲起 玄幕は雲のごとく起くる

「素甲」について李善は、『楚漢春秋』より、「趙中大夫曰、『臣聞越王句踐素甲三千』（趙中大夫曰く、『臣は越王句踐

の素甲の三千なるを聞く」と)という記事を引いている。対句には雲が登場していて、李賀と発想が類似する。『文選』に収録されるような広く知られた作品である点も加味すれば、このあたりに「雁門太守行」初二句の全体的な構成の淵源を求めうるかもしれない。

唐代に入ってから同様のモチーフがさまざまなバリエーションによって詠じ続けられることとなる。

まずは韓休(六七三〜七四〇)の「奉和聖制送張說巡辺」(『全唐詩』卷一一一、全二〇句)を見たい。

7 曙光揺組甲 曙光 組甲に揺れ

8 疏吹繞雲旌 疏吹 雲旌を繞る

「組甲」はひもで皮や金属をつなぎ合わせて作った甲冑を指す。威容を整えた兵士たちの甲冑に朝焼けの光が当たって揺らめくように反射しているというのであろう。

天宝十三載(七五四)の進士である韓翃の「送劉將軍」(『全唐詩』卷二四五、全八句)については首聯を引く。

明光細甲照鏐鍛 明光 細甲 鏐鍛^{あか}を照らす

昨日承恩拜虎牙 昨日恩を承けて虎牙を拜す

「鏐鍛」とは首筋を保護する鎧のことであり、光がそのあたりを照らし出しているという。甲冑の細部に觀察を及ぼした句となっている。

姚合(七七八〜八五九)の「劍器詞三首」(其二)(吳河清『姚合詩集校注』上海古籍出版社、二〇一二、五四二頁、全八句)は、舞曲の歌詞であり、次のように見えている。

3 雪光偏著甲 雪光 偏に甲に著れ

4 風力不禁旗 風力 旗を禁^{とど}めず

『姚合詩集校注』が「謂甲映雪光、旗不禁風」(五四三頁)というように、甲冑が雪明りに照り映え、旗が風に揺れる様子を詠じている。

続いて、会昌四年(八四四)の進士であり、姚合などと交際のあった馬戴の「贈淮南將」(『全唐詩』卷五五五、全一二句)はどのように詠じられているであろうか。

9 塞色侵旗動 塞色 旗を侵して動き

10 寒光鎖甲明 寒光 鎖甲明らかなり

寒々しい光が甲冑を明るく照らし出している、というのである。

改めて述べておけば、李賀以前の詩において「甲光」の語が甲冑に反射する光の意で用いられたことはなかった。ただし、「甲」と「光」の両字を使用しながら同様のモチーフを詠じた例は少なくない。蔡琰や曹丕をその先蹤と見なしうる。また、雲と対に構成されていることから、「雁門太守行」の初二句が、潘岳「閼中詩」に発想を借りてい

た可能性があるという点についても前述したとおりである。
「金鱗」の語に關しても李賀の独自性がうかがえる。唐代以前の詩に「金鱗」の語は見られない。従つてこの語を詩に取り入れた早い例は杜甫（七一二〜七七〇）であると判断できよう。

21 泉出巨魚長比人 泉は巨魚を出して長さは人に比す

22 丹砂作尾黄金鱗 丹砂を尾と作り黄金を鱗とす

「沙苑行」（仇兆鰲『杜詩詳註』卷三、全二四句）

馬の放牧地である沙苑の泉から出てきた魚は人間ほど大きく、その尾は赤く、鱗は黄金であつたという。沙苑の靈驗を示唆するかのような異形の魚だったのである。「金鱗」と熟すわけではないものの、字義どおり黄金のようにきらめく魚の鱗を詠じているのである。

李紳（七七二〜八四六）の「憶東湖」（盧燕平『李紳集

校注』中華書局、二〇〇九、四四頁、全八句）は洪州城内にある東湖で舟遊びをしたときに見た景色を回想した作品である。

5 魚驚翠羽金鱗躍 魚は翠羽に驚いて金鱗躍り

6 蓮脱紅衣紫葍摧 蓮は紅衣を脱して紫葍摧く

採餌するために水面に降りた鳥に魚が驚いて身を翻した瞬間の鱗のきらめきを、「金鱗躍る」と詠じたのである。

これ以降の唐詩においても「金鱗」の語は用いられるが、そのうちのほとんどが魚の美称であり、李賀のように「金鱗」を比喩的に用いた例は見られない。

ここまで「雁門太守行」の第二句について検討を加えてきた。この句においてまず特筆すべきは、「甲光」の語が前代の詩に見られない点である。李賀は、「甲」と「光」を別々に詠じる蔡琰や曹丕をはじめとする漢魏六朝期の詩、あるいはその延長上にある中唐までの詩に着想を得た上で、自分なりの工夫をこらしているのである。「金鱗」の語についても唐代以前の詩に用いられた形跡はない。唐代に至っても、明らかに李賀以前の例と判断できるのは杜詩のみであり、これも「金鱗」の二字が熟しているわけではない。つまりこの語については李賀や李紳を先駆とするのであつて、ここでも李賀は先人の手垢がついていない語を選び取っているといえるのである。

以上のように、語彙のレベルにおいて、前代の表現に捉われない新鮮味を醸し出している一方、光を反射する甲冑という詩の素材は伝統的なものであつた。本節では「甲」と「光」の両字を用いている詩句を中心に取り上げてきたが、それ以外の文字によって同様のモチーフを詠じた詩句も含めれば、こうしたモチーフがいくかに多くの詩人たちに

注目されてきたかが一層はつきりするだろう。今はそれらの表現を逐一検討することはできないが、仮にこうしたモチーフを詠じた表現群における李賀の独自性を見出すとすれば、それは、広い空間を瞬時に捉えた手際のよさであると考えられる。つまり、漢魏六朝期の例にしても、李賀以前の唐詩にしても、語り手の視点はあくまで光をはじいて

いる甲冑、なかなか兵士たちに向けているのに対し、李賀の句は、月と兵士たちを結ぶ空間、光の往来するその広い空間をも含んだ表現となっているのである。このように理解する場合、「向月」という語は欠くことのできない重みを持つことになる。「雁門太守行」と趣向は異なるが、例えば賈島（七七九～八四三）の七絶「夜集烏行中所居」（齊文榜『賈島集校注』人民文学出版社、二〇〇一、四七九頁）には次のように詠じられている。

1 環爐促席復持杯 環爐席を促して復杯またを持す

2 松院双扉向月開 松院の双扉 月に向かって開く

仮にこの詩が五言詩だとして、「松院双扉開」としてしまつては、句の含む空間的な奥行きがほとんど感じられなくなってしまう。「雁門太守行」についてもそれは同様である。単に甲冑を鱗に喩えるという比喩の奇抜さのみを前面に押し出すような句であつたならば、あるいは韓愈に激

賞されることはなかったかもしれない。

三 後世の詩への影響

既述のとおり、「雁門太守行」の初二句は、韓愈に評価されたのをはじめとして、王安石や楊慎といった後世の詩人の議論の的ともなった。また、それだけにとどまらず、実作にも取り入れられていった。とりわけ冒頭の「黒雲」の句は摸擬の対象とされることが多かったようだ。本節ではそうした例を取り上げて、後世の詩人に対する李賀「雁門太守行」の影響の一端を確認していきたい。

晁補之（一〇五三～一一一〇）の「游栖巖寺、呈提刑學士毅夫兄」（『雞肋集』卷九、全五〇句）には、

1 飛樓庄城城跨野 飛樓城を圧して城は野に跨り

2 黄河逶迤避条華 黄河 逶迤として条華を避く

とある。城郭全体を威圧するように高くそびえる樓閣が詠じられている。同じく宋代の鄧肅（一〇九一～一一三二）は「電」（『栢欄集』卷七、全一二句）において、「城」を

「山」に、「摧」を「頽」に入れ替えて、次のようにいう。

1 黒雲庄山山欲頽 黒雲山を圧して山頽れんと欲し

2 阿香推車振不開 阿香車を推して振るえども開かず

山が崩れるほどに重々しくかぶさる雲が描写されている。

「阿香車を推す」、つまり雷が鳴ってもびくともしないような厚い雲なのである。

宋代以降の詩人も「黒雲」の句にアレンジを加えながら転用している。延祐（一三一四～一三二〇）初年の進士である王沂は鄧肅と同じように「城」を「山」に作っている。

3 獐飈折樹怒未已 獐飈樹を折つて怒り未だ已ま^{どうひょう}ず

4 黒雲庄山山火起 黒雲山を圧して山火起こる

「焼山」（『伊濱集』巻五、全二八句）

狂ったように吹き荒れる風が木々をなぎ倒してもやまず、落雷による自然発火であろうか、山火事も起こったというのである。順治十六年（一六五九）の進士である葉方藹も新たなバリエーションを生み出した。

1 黒雲庄波波如山 黒雲波を圧して波山の如し

2 銀城雪屋翻飛間 銀城 雪屋 翻飛の間

「渡江行」（『読書齋偶存稿』巻三、全二〇句）

重圧感のある雲と、山のごとく高く盛り上がった波のせめぎ合いが臨場感を伴って表されている。

「黒雲」の句は日本の詩人にも影響を与えた。頼山陽（一七八〇～一八三二）の「重謁加藤肥州廟引」（『山陽詩鈔』巻四、全三二句）には、次のように見えている。

17 大雪庄城城欲俯 大雪城を圧して城俯せんと欲す

18 凍鎧黏膚戰且剖 凍鎧^{ただ}膚^{はだ}に黏^{ねば}り戰^{あが}且に剖^{あざ}けんとす
城を押しつぶすほどの大雪が降る冬の戦場を描写しているのである。

以上に列挙してきた詩を見てわかるように、後世の詩人たちはさまざまに語彙を入れ替えながら「黒雲」の句を自作に取り入れている。そうした中であつてすべての詩に共通しているのは、第三字に「圧」を用いること、第四・五字に同じ字を重ねることの二点である。また、大半の詩において、「黒雲」の句に模擬した句が初句に配置されているため、そこに李賀詩の影響を看取することが可能である。初句に配してこそ、模擬した句の詩的効果が最大限に発揮できると考えられていたのであろう。

おわりに

ここまで李賀「雁門太守行」の初二句について考察を加えてきた。二句の特質を改めてまとめると次のようになる。第一句の「黒雲」の語は、李賀以前においてもしばしば戦場の景物として用いられていた。ただしそれらは木々や旗幟などといった対象を覆い隠す遮蔽物として詠じられることが多い。城郭を破壊しかねないほど重々しくのしかかる「黒雲」を詠じているのは李賀のみである。「雲+圧+

「対象」というフレーズは、盛唐の頃から詠じられ始めた新しいものであった。特段目新しい語彙は用いられていないものの、その組み合わせによって、城郭が瓦解する寸前の、緊張感を伴った劇的な場面を形象することに成功している。また、後世の「黒雲」の句を模擬した句が、第四・五字に同字を重ねるリズムを踏襲していることから考えると、こうしたリズムが「黒雲」の句に欠かせない特徴として後の詩人たちに認識されていたと理解できる。

第二句についてはまず、前代にはほとんど用いられていない語彙を詠じているところに特質が看取される。切り離して別々に詠じられる傾向にある「甲」と「光」を熟語として詩に用いたのは李賀が最初であろう。先例を十分踏まえた語彙であるだけに自然な印象を与える語となっている。「金鱗」については、杜甫のような類似した先行例や、李紳のようなほぼ同時代の例があった。当時の詩語としては新鮮な語彙であったことだろう。光を反射させている兵士の甲冑に見立てたのは李賀の独創であると判断できる。月光をはじく甲冑を身にまといながらうごめく兵士の集団は、さながら地上を泳ぐ大魚であった。月と兵士を単に点綴するのではなく、その中間をも含んだダイナミックな空間が描出されているのも「甲光」の句の持ち味である。

二句に使用されているそれぞれのモチーフは李賀以前の詩にも詠じられており、唐代に入ってから同様であった。例えば、光を反射させる甲冑というモチーフは、漢末ころから李賀に至るまでほぼ継続的に詠じられてきた。「雁門太守行」の初二句が後世の衆目を集めるような句となりえた理由は素材の目新しさにあるのではない。李賀は、前代に詠じられたモチーフを継承しつつ、語彙の組み合わせや見立ての新鮮さによって独自の詩的光景を現出させたのである。意図的であるかどうかは別にしても、いわばありそうでなかった表現、詠じられてみれば確かにそれが最もしっくりと落ち着くような字句の配置が、衆目を惹きつけ続けることとなった外せない要因の一つとして想定されるのである。

注

(1) 引用は『唐五代筆記小説大観』（上海古籍出版社、二〇〇〇）に拠る。

(2) 松浦友久編『統校注唐詩解詁辞典』（大修館書店、二〇〇一）は、李賀が七歳のときに韓愈と皇甫湜が訪ねてきて、幼いながらに書いた詩のできればのよさに驚嘆したという、王定保『唐摭言』に収める逸話を取り上げた上で、「もし……韓愈と李賀が出会っていたとするなら、わざわざ李賀が韓愈を

訪問するはずはない。従って、少なくともどちらか一方の逸話が事実でないことになろう」と述べる（担当執筆は山崎みどり）。

(3) 引用は王仲鏞『升庵詩話箋証』（上海古籍出版社、一九八七）に拠る。

(4) 王安石の発言は、王得臣『塵史』巻中（朱易安・傅璇琮等主編『全宋筆記』第一編、一〇、大象出版社、二〇〇三、所収）に見える。

(5) 楊維禎「鴻門会」（『鉄崖古楽府注』巻一）の第二句。

(6) 雲南で勃発した、安銓・鳳朝文の反乱を指す。

(7) 「日」と「月」の異同は定めがたいが、第四句に「夜」とあることから、本論では底本に従い、「月」に作って行論する。

(8) 「雁門太守行」初二句の表現上の特異性を探るといふ本稿の目的に照らせば、『幽閑鼓吹』などの諸書の記述を一応事実として受け取ることが、むしろ有効な手段たうると考える。

その場合、李賀の詩の特異性もさることながら、それを評価した韓愈の作風や文学観にも配慮する必要がある。例えば荒井健「李賀の色彩感覚」（『秋風鬼雨』筑摩書房、一九八二、所収。初出は『中国文学報』第三号、一九五五）は、二人の作品を比較して基本的な作風の相違を指摘した上で、部分的には同様の表現が認められる点にも言及する。一方、山崎みどり「李賀と韓愈——諱事件を中心として——」（『長崎県立国際経済大学論集』第七九号、一九九〇）は、韓愈と李賀が緊密な関係にあったと一般的に考えられていることについて、

従来通説に捉われない、綿密な伝記的事実の検証が必要であると述べている。李賀詩が評価された必然性を韓愈の側から探るには考察すべき問題が残るが、それについては後考に期したい。

(9) 李賀以降の唐詩も含めれば、七言句の第四・五字に「城」字を配する例として、「可歎吳城城中人、無人与我交一言」（吳融「風雨吟」、『全唐詩』卷六八七）、「水隔孤城城隔山、水辺時望憶師閑」（齊己「宜春江上、寄仰山長老二首」〈其一〉、王秀林『齊己詩集校注』中国社会科学出版社、二〇一一、四六四頁）を挙げることができるが、いずれも「摧」字とは結びつかない。

(10) 李益との交際があったと考える注者もいる。例えば、「潞州張大宅病酒、遇江使、寄上十四兄」（『箋注』五七七頁）の「十四兄」について姚文燮は、「兄当是李益」と注を付しているが、それに対して『箋注』は「不可信」とコメントを加えた上でその根拠として、岑仲勉『唐人行第錄』（上海古籍出版社、一九七八）に李益の排行は十であると記されていることを挙げる。

（筑波大学大学院在学）